

# ダウン症児に対する遊びの場としての音楽療法

～ウィニコットの理論を通しての一考察～

野 尻 恵美子

(2006年1月30日受理)

## I. はじめに

子どもは遊びを通して学習し、発達する。D・W・ウィニコットは、子どもでも大人でも遊ぶということにおいてのみ創造的になることが出来るとし、また「遊ぶことは成長を促進し、健康を増進する。また、遊ぶことは集団関係を導く」<sup>1)</sup>と述べている。通常子どもは、大人から提供されなくても自分自身で遊びを発見し、それを展開させることができ、結果的に様々な能力を身につけることができる。しかし障害を持った子どもは、積極的に遊ぶことが困難で、治療の場において遊べる空間を提供する必要がある場合もある。

本対象児はダウン症と診断された、女兒である。ダウン症の特徴として、身体発育、精神発達の遅れ、構音障害があげられる。それらにより言語発達が遅れたり、発音が不明瞭になりやすい。その他に対象児の目立った特徴として、積極的に行動することが少なく、自由に遊ぶことが困難であった。また自ら要求することも少なかった。そのためセッションの場で対象児の発達段階に合った遊びの場を作る必要があった。

「遊ぶことはそれ自体が治療である、ということを常に念頭に置いておくことは価値がある。つまり、子どもを遊べるように調整してやること自体が、直接的普遍的な応用性をもつ精神療法なのである。」<sup>2)</sup> 対象児に対しては音楽療法を行ったが、音楽はそれ自体が遊びの要素を持っている。また音楽療法の共通原理の一つに「音楽の持つ基本的性格である、音による楽しみという要素は欠かすことができない」という点があげられ、音楽を用いることにより、楽しみながら遊びやすい空

間を作りやすいということが考えられた。また音楽には「知的過程を通らずに、直接情動に働きかける。」(松井)という特性があり、言葉を媒介としない心理療法として位置づけられている。治療開始時、言語を用いる以前の発達段階であった対象児にとって音楽療法は最適な治療法であった。

子どもにとって母親の存在は非常に重要な意味を持つ。ウィニコットは「人間の幼児の情緒発達の早期の段階においては、幼児が実はまだ自分から分離できないでいる、環境が非常に重要な役割を果たしている。自分から自分でないものが分離することは徐々に起こってくる。その速度には、その幼児によって、その環境によって、かなりの多様性が見られる。その重大な変化は、客観的に知覚される環境の中で目だつものとして、母親を分離するとき起こってくる。もし、母親になるべき人間がいないと、幼児の発達の課題は無限に入り組んだものになってしまう」<sup>3)</sup>としている。

ここではウィニコットの理論に基づき、セッションにおいての、母親およびセラピスト(以下Th)の機能についてまた遊ぶことの重要性について考えていきたい。

## II. 目 的

自由に遊びを発見し遊びを通して発達していくことが困難である対象児に対し、音楽療法の中でThが対象児の発達水準に合った遊びを提供し、発声、発語を促すことを長期目標に個人セッションを行った。その治療過程をウィニコットによる「依存の諸段階」に沿って述べ、その中で母親またはThがどのような役割を果たしたかということ、また対象児にとって遊べる環境を作ることで

いかに発声、発語の発達を促進させたかを分析、検討することを本研究の目的とする。

### Ⅲ. 方 法

#### ① 対象児について

対象児は平成15年生まれで現在2歳8ヶ月の女兒である。生後2ヶ月でダウン症と診断された。家族構成は、両親、姉1人である。

交流の状況は、発声は少ないが見られ、発語に関しては、対象児の名前を呼んだときに「はい」と返事をしたり、帰る際「ばいばい」と言うなど、特定の単語であれば可能である。非言語の交流として、「もう一度」を要求する際指を1本出す、何かして欲しいときにそちらを指さすというものがあげられる。Thに対する認知はあり、二語文の指示は理解出来る。家庭では姉とも遊ぶそうであり、家族との交流はある。

認知機能の発達状況は、Th、コワーカー（以下Cw）に対する認知は正確である。自分の名前も認知しており、名前を呼ばれると手を挙げて返事をする。楽器の操作に関しては、鈴やマラカスなどの小楽器、太鼓のリズム打ちは対象児自身のテンポであれば行える。また音楽の始まりと終わりの認知も可能である。模倣は初めて行う活動であっても繰り返し行えば毎回ではないが可能となった。Thが演奏する曲とその内容が描かれた絵の一致可能となってきており、聴覚と視覚が統合し象徴機能が形成されつつある段階である。

運動機能は、歩行は不安定ではあるが可能である。トランポリンを跳ぶことは出来ない。病院において聴覚の異常を指摘されたようであるが、セッション中それが要因で活動が困難になることはなかった。

その他の行動特性として、背中が異常に曲がりそのまま固まってしまうことが見られる。現在では、その場に母親がいれば対象児から積極的に遊ぶことも可能となった。ミュージックパッドなどをTh、Cwと楽しんだ後、母親の元へ戻り甘え愛情を確認し、再度遊びに戻るといった行動を繰り返すことも見られる。

#### [初診時の様子]

治療開始時の対象児は生後6ヶ月であった。

首のすわりも不完全であり、横になったままセッションを行っていた。発声はなかった。Thに対する認知もなく、与えられた刺激を受け入れるのみで、快、不快の反応も少なかった。しかしツリーチャイムなど、対象児にとって刺激の強すぎた活動を行うと泣き、そのまま暫く母親に抱っこされ、あやされていた。一方で、揺らす活動など前庭感覚に対する刺激には笑顔が見られた。楽器などに手を伸ばすことはなく、掴むこともできなかった。ピアジェの発達段階によると、感覚運動段階の第2段階であった。またウィニコットによる「依存の諸段階」においては、第1の母親の「抱える」機能がはたらいっている状況であり、「絶対的依存の段階」であった。

#### ② 治療構造

期 間：

平成15年11月～平成18年1月 現在継続中

頻 度：

週1回の個人セッション 計79回

人的構造：

Th（筆者）、Cwは第3期より参加、母親は第1, 3, 4, 期は常に入室、第2期は母親が仕事のため祖父母が入室していた

場 所：

仁愛女子短期大学音楽館の一教室

使用楽器：

鈴、マラカス、カスタネット、太鼓、木琴などの打楽器およびラッパなど

使用遊具：

トランポリン、ミュージックパッド

### Ⅳ. 経過と結果

人的構造の変化に伴った対象児の発達段階に並び、4つの期間に分けて治療経過、および結果を述べる。

#### 第1期

「絶対的依存の段階」でのセッション

S.1～S.15

人的構造はTh、母親

治療開始時の対象児は生後6ヶ月であり、母親に抱かれて入室し、セッション中も常に母親がそばにいる環境で活動を行った。この時期の対象

児は外界からの刺激を快、不快で反応することが出来なかったため、様々な刺激を体験することで音源などへ注意を向けさせ、刺激に対し表情や声による反応を引き出すことを短期目標とした。当初、対象児から楽器に触れようとしたり、興味を持つことはなく、Thから与えられた刺激を一方向的に受け止めていた。楽器などを掴むことも出来なかった。首も座っておらず、仰向けに寝たまま活動することが多かった。主な活動はトランポリンや布で揺れる、鈴やマラカスなどの小楽器の音を聞く、母親に抱かれた状態でThのピアノを聞くなどであった。徐々に様々な刺激に対し反応を見せるようになり、抱っこや揺れる活動など、触覚刺激、前庭感覚への刺激を好み、笑顔を見せるようになった。反対にツリーチャイムのような聴覚への刺激の強い活動は泣いて拒否したが、その後母親に抱っこされ、あやされると安心し、再び活動を行うことが出来た。対象児の反応は泣くことと笑顔を見せることのみで、発声はなかった。Thへの認知はなかったが、拒否することはなく、視線を合わせることはあった。S.10頃になると、母親が対象児の背中をささえた状態であれば座って活動することが可能となった。視覚から刺激を受け止めやすくなり、楽器を見つめることは見られるようになったが、やはり自分から触ろうとはしなかった。しかしThが小楽器を差し出すと、それを掴み振ることが見られるようになった。

第1期の対象児は触覚、前庭感覚、固有感覚などの初期感覚が優位である段階から、聞こえてくる音に注意を向けるという受身的感覚活動の段階であった。またこの時期の母親の機能は、対象児にとって常に感じとれる存在であり、絶対的依存を保障されているというものであった。対象児は其中で安心感を持つことが出来、セッションの場に適応することが出来た。

## 第2期

母親から分離された状況でのセッション

S.16～S.52

人的構造はTh、祖父母

第1期における母親から保障された環境でのセッションを通して、楽器や音へ興味を持つようになったので、この時期は、更に音楽的な刺激を

与えることによって対象児の快反応を引き出し、リズムカルな身体運動を促進させながら発声を促すことを短期目標においた。当初から対象児とともに活動を行ってきた母親が仕事を始めたため、第2期では祖父母とともにセッションを行うこととなった。

この時期に行った主な活動は、小楽器や太鼓のリズム打ち、ツリーチャイム、Thに抱っこされた状態でThのピアノを聞く、また対象児が弾くことなどであった。活動に対し徐々に意欲や関心を見せ始めた対象児であったのが、この時期では治療開始時のように固まってしまい、自由に音楽で遊ぶことがほとんど見られなくなった。そばにいる祖父母が楽器を持つように指示をするが、対象児はほとんど興味を示さなかった。鳴らしてもすぐに止めてしまい、楽しそうな表情はなかった。これは絶対的依存を保障する母親から分離された状況に置かれたため、対象児の中で不安が生じ、自由に遊ぶことが困難になったためであると考えられる。この時期の対象児は、第1期同様、「絶対的依存の段階」にあった。そしてこの時期の母親の機能は「抱えること」である。子どもは抱えられるなかで生理的な障害や外界からの侵害から完全に守られることも出来るのである。

この時期にThは以下の2つのことを行った。まずは対象児の好んだ、「ちょうちょう」や「キラキラ星」「チューリップ」など、規則正しい拍を持つ音の連なりによって構成されている曲を使用した。これは乳児が母親に抱かれながら聞く母親の心拍音と同じ意味を持ち、恒常性と安定性を持つ。このような規則正しく響く音の使用は、対象児の不安を取り除き、安心、安全を保障することができたと考えられる。次に、規則正しい拍によりThと調和している対象児に揺さぶりをかけ、新たな表現へ広げていくことを促した。これはThと対象児とで、ピアノの即興や新たな曲の演奏を行うことであり、より発展的な情緒交流を促すことにつながった。

このように第2期では母親と分離した状況でのセッションであったため、対象児が自由に遊べない環境であったが、Thが音楽的作用を用い、母親としての機能を一部果たすことによって、

Thとの情緒交流を促すことが出来できたと考えられる。

### 第3期

「相対的依存の段階」でのセッション

S.53～S.68

人的構造はTh、Cw、母親

第2期では母親が不在の状況でのセッションであったが、第3期では母親が仕事を辞め、再びセッションに参加するようになった。またCwを加えた。この時期は対象児にとって母親に完全に守られた状況を提供し、「絶対的依存の段階」からやり直すことで、対象児に安心感、安全感を再度持たせた。そして対象児の発達段階に応じて、自分の欲求を信号として母親に伝えようとする「相対的依存の段階」に移行させ、その中で自由な音楽遊びを通し、発声、発語を促すこと更には認知機能の発達を促すことを短期目標とした。

この時期行った主な活動は、小楽器や太鼓、木琴のリズム打ち、歌唱に加え、「げんこつ山」「むすんでひらいて」「ぞうさん」など、対象児が好んでいる曲を用いた動作模倣であった。始めは対象児が既に行ったことのある活動でなければ模倣出来なかったが、「むすんでひらいて」の際などに新しい動作を行っても模倣が可能となった。また曲の始まりと終わりを認知させるために、ピアノが鳴っている間のみ対象児が太鼓を叩く活動を取り入れた。対象児はまず曲の終わりを理解するようになり、Cwのモデリングはあったが、ピアノが止まると太鼓を叩くことを止めるようになった。やがてThの言語での指示やCwのモデリングにも支えられ、曲の始まりも認知するようになった。更に木琴のリズム打ちにおいては、Thが弾く曲のメロディーに合わせて叩くようになり、それに伴って歌詞の一部を口ずさむこと見られるようになった。その際対象児は木琴を叩きながら、リズムに合わせて自然に身体を左右に動かしていた。表情も豊かとなり、楽器や音楽で楽しみながら遊んでいるように感じられた。そしてリズム遊びの中で対象児の発声を促すことが可能となったと考えられる。

この時期の母親にはまず対象児が活動中、抱っこや甘えることを求めた際、対象児の欲求を完全

に満たす存在として機能してもらった。母親に抱えられる体験を十分にさせたことにより、対象児が完全に安全感、安心感を取り戻し、再び自由に遊ぶ意欲を持たせることができた。次の段階として、母親に対象児の欲求に完全に対応せず、対象児の対処能力を超えない範囲で対象児の思い通りにならない存在として機能することを求めた。活動中に対象児が母親に抱っこを求めても、その活動が終わるまで待たせたり、模倣の際など母親に抱かれた状態で活動したがる対象児に、曲が終わるまではCwと向き合い活動させた。

このように第3期では、対象児にとって母親が「絶対依存の段階」から「相対的依存の段階」に移行していった。母親が「ほどよい母親」としての機能を持つことにより、子どもが母親を内在化する能力と融合しながら、子どもを包みこむ空間(潜在空間)が生まれていった。それによりセッションの場が対象児にとって遊びの場となり、創造的体験の場となることを可能にし、新しい活動を遊びとして楽しみながら認知機能の発達を伴い、発声、発語を促すことにつながった。

### 第4期

「潜在空間」における遊びの活発化

人的構造は第3期同様 S.69～S.79

第3期において生まれた「潜在空間」において、遊びを通して対象児の発達を促すことが出来た。第4期は対象児の歩行も可能となった。これは、M.マーラーによる「固有の練習期」にあたり、直立歩行、言語、手の操作などの練習に夢中になる時期である。そのため「潜在空間」における遊びを通し、発語をはじめ、様々な機能を促進させることをこの時期の目標とした。行った主な活動は、第3期における活動の他に歩行の練習、音の認知のためにミュージックパッドを踏む活動を行った。また視覚と聴覚の統合や物をイメージする機能(象徴機能)を促進させるために、関連する絵が描かれた絵本を見ながらの歌唱活動を取り入れた。

この時期の対象児は自ら母親から離れ、積極的に遊ぶことが多く見られるようになった。遊びたい遊具や楽器を取りに行きCwと共に遊ぶことも多くなった。特に対象児が夢中になった活動

は、絵本を見ながらの歌唱活動であった。対象児自身が歌うことは少なかったが、歌いたい曲の絵を指さしThにピアノを弾くことを何度も要求した。視覚からの刺激を取り入れることにより歌のイメージが膨らみ、曲に対する興味を持たせることができたと考えられる。またCwを自分と一緒に遊んでくれる相手と認知し、ミュージックパッドを対象児とCwとで並べ、手をつないで踏むことなども見られた。発語に関しても「始まりの歌」の際、対象児の名前を呼ぶと「はい」と返事することや、セッション終了時に「バイバイ」と挨拶することが可能となった。

このように第4期では対象児から母親に甘えることが減少し、母親がその場に不在でも遊ぶことが可能であるかのように感じられた。しかし実際に母親がいなくなってしまうと、活動への意欲は下がり遊ぶことを止めてしまうと考えられた。それは遊ぶことは幼児と母親の間にある「潜在空間」に属しており、そこでは母親は幼児にとって絶対的存在であり、信頼が含まれ、幼児が当然のように求める適応的機能を有しているからである。

このような治療経過のなかで、対象児は遊びを通し、長期目標にあげた発声、発語の発達を促すことができた。

## V. 考 察

### i 依存の諸段階

「依存とは人間の乳幼児がその条件が与えられないと存在することも発達することもできないような基本条件である。『乳幼児の潜在力は母親による養育と結びついたものにならないかぎり、乳幼児そのものにはならない。』」<sup>4)</sup>そしてこの依存は、①抱えること：これは実際に幼児の身体を抱くことを意味するだけではなく、母親と幼児が互いに独立する個人として共に生きるという概念が幼児にできあがるまでの段階で環境から与えられるすべての供給を含んでいる。②母親と幼児とが互いに独立した個人として生きる：すでに幼児が母親に吸収された状態から離脱し、対象（母親）を自己の外側のものとして知覚していること、つまり対象関係がすでにできあがっている段階である。③父親、母親、幼児の三者がともに生きる

という3つの段階をたどる。また依存は次のように分類することができる。第1は「絶対的依存の段階」であり、乳幼児はまったく受身的に依存している。ここでは母親の育児について知る手立てさえもっていない。第2は「相対的依存の段階」であり、幼児はどんなことをしてもらいたいかを自分で知るようになり、それを独自の欲求に結びつける。第3は「独立への方向を持った段階」で、母親の養育がなくてもやってゆけるだけの手だてを発達させている。また環境に対する自信も発達している。

今回の治療経過における第1期、第2期は「絶対的依存の段階」にあった。第1期では対象児は母親に抱っこされているか、常に触覚、聴覚、視覚によって母親を感じとれる環境でセッションを行った。またツリーチャイムのように、対象児にとって外界からの侵害となる活動を行った際は、母親にあやされることによりその侵害から守られることができた。しかし第2期では絶対的依存を保障する母親からの分離により、母親からの抱っこことややすことの供給がなかった。それにより対象児のなかで不安定感が生じ、遊びを楽しむことができなくなった。そこでTh「キラキラ星」「ちようちよう」「チューリップ」などの曲を使用し、歌唱やリズム打ちを行った。これらの曲は規則正しい拍をもつ音の連なりによって構成されている。これはパルスと呼ばれ、「規則的にあらわれる正確に等しい刺激の連続のひとつである」と定義されている。(Cooper&Meyer1960)このパルスの連続は、エネルギーの均衡状態をあらわし、受動的に浸ることで安全な感覚を獲得するだけでなく、能動的に知覚することで安心感を得ることがある。パルスに包まれているということは母親の心拍を聞き続けて眠る乳児の状態といえ、安定状態であるといえる。これはThによって「抱えること」としての環境を作り出したことを意味する。更に、安定した反復リズムを用いての即興的な音のやりとりを行った。これは対象児の新たな表現の領域を広げ、対象児が自己とThとの一体性と分離性を同時に体験する世界を形成することにつながった。ここではThが「ほどよい母親」としての機能を果たし、対象児とThが協働

で音楽的な「潜在空間」創造することができた。つまり第2期においてはThが音楽の作用を用いて母親の機能を果たしたと考えられる。第3期では「絶対的依存の段階」から「相対的依存の段階」へと移行することができた。ここでは対象児にとって母親が、完全に欲求充足の対象として機能せず、対象児からの欲求が送られない限りそれに対応しないように、また常に対象児の思い通りにならない存在として機能するようにした。「ほどよい母親」とは、完全に良い母親とか立派な母親という意味ではなく、幼児にごく自然に備わった生存的潜在力の発達を促す程度にはほぼ良い平均的で平凡な母親のことである。子どもの欲求にそのまま応じるのではなく、ややタイミングをずらして応じることで子どもに欲望を体験する機会を与えることができる。「絶対的依存の段階」から「相対的依存の段階」へ移行する時期は非常に重要である。「抱えること」の時期が早く失われすぎると、子どもは過度に反動的になり、防衛的性格を強化させたり硬直した人格構造を発達させ、反対に「抱えること」の環境が長く続きすぎると適度な欲求不満あるいは耐えられるレベルの不安や、欲望や葛藤が妨げられ、子どもは自分自身への対処の仕方学ぶ機会を逸することになるからである。第4期では対象児は母親がその場に存在していれば一人で活動できるようになった。これは治療経過において母親に守られる体験を十分にしたためであると考えられる。「成熟や一人でいられる能力は個人が適切な母親の世話を通じてよい環境を信用する機会をもったということを示している。この信用は十分な本能満足が繰り返さされてはじめてできるものである。」<sup>5)</sup> また「“わたくしは一人である”は“わたくしはいる”からの発展であり、たよりになる母親がいつも居るということを幼児が気づいていることが前提となる。そして母親に対する信頼にもとづいて幼児はしばらくのあいだは一人となり、一人を楽しむことができるようになるのである。」<sup>6)</sup>

以上述べてきたように、「絶対的依存の段階」にいた対象児に対しその発達段階に応じた機能を母親に果たしてもらうことによって、また母親がその機能を果たすことが不可能であった時期にお

いては、Thが音楽の作用を用い母親の機能を果たすことにより「相対的依存の段階」に移行することが可能となった。

## ii 遊ぶことについて

ウィニコットは「遊びにおいて、遊ぶことにおいてのみ、個人は、子どもでもおとなでも、創造的になることができ、その全人格を使うことができるのである。そして、個人は創造的である場合にのみ、自己を発見するのである。」<sup>7)</sup>と述べている。先にも述べたように対象児は自由に遊ぶことが困難であり、治療において遊びを提供し発達を促していくことが必要であった。そこでThは対象児の発達段階に応じて、主に音や音楽を用いた遊びを用意し、まず対象児が自由に遊べる空間を提供し遊ぶこと自体を治療目標にあげ、そのなかで発声、発語を促すことを目指した。また音楽にはそれ自体遊びの要素を持っているため、遊べる環境作りに音楽の使用は適していたと考えられる。「私たちは、音楽を創造する営みのなかで、ことばによる意味づけの必要のない音を漂わせ、そうした音を使って即興的に遊ぶことができるのです。」<sup>8)</sup> 第1期の対象児は外界からの刺激をうまくコントロールできない段階から、聞こえてくる音に注意を向けるようになる、受身的感覚運動の段階を経て、徐々に能動的に音を楽しむようになった。ここでは「ほどよい母親」の機能が重要な意味を持ち、それにより子どもが母親を内在化する能力と融合しながら子どもを包みこむ空間「潜在空間」が生まれた。また潜在空間では内界と外界、自己と非自己、一次過程と二次過程、現実と一次的空想との混合が生じ、母親と乳児とのあいだの空間それ自体を指している。「母親への確信が、ここに中間の遊び場を作り、その場で、赤ん坊はある程度全能感を体験するので、魔術という観念が生じてくる。—略—これを私は遊び場と呼ぶ、つまりそこから遊びが始まるからである。その遊び場は母親と赤ん坊の間の、あるいは母親と赤ん坊を結びつける、潜在空間なのである。」<sup>9)</sup> 第2期における対象児とThとの音楽空間も「潜在空間」であったと考えられ、対象児はこの空間で音、音楽を通してThと遊ぶことが可能

となった。このことは音楽を演奏することと遊ぶことは同じ意味を持つということが出来る。第3期以降は母親との遊びから、Thとの遊びを楽しむようになった。それは対象児のなかで母親とともにいながら「一人でいられる能力」が発達したためであった。Thはその際、一方的に遊びを提供したり、対象児の遊びを見守るのみという態度ではなく、対象児とともにThも遊びを楽しむことが重要であった。歌唱やリズム活動、絵本を用いた活動など、音楽や視覚的要素を取り入れ、相互に遊ぶことを通して、発声、発語を促し、認知機能を促進することができた。ウィニコットは「精神療法は2つの遊ぶことの領域、つまり、患者の領域と治療者の領域が重なり合うことで成立する。精神療法は一緒に遊んでいる2人に関するものである。以上のことの当然の帰結として、遊ぶことが起り得ない場合に、治療者のなすべき作業は、患者を遊べない状態から遊べる状態へ導くように努力することである。」<sup>10)</sup>と述べている。

以上、対象児の発達を依存の諸段階から分析し、そこでの母親の機能、Th、音楽の作用について分析し、遊びの重要性について検討を行った。

今後の課題として更に対象児の遊びを発展させ、創造力や象徴機能の発達を促していきたい。同時に対象児の発達段階に応じ、「一人でいられる能力」の発達も促進させる必要がある。「一人でいられる能力」を発達させたことのできた人は絶

えずその個人に特有の独自の衝動を再発見でき、独自の衝動が無駄にされることはない。というのは一人である状態は誰か他の人がそこにいるということの意味する(逆説的ではあるが)何かであるからである。時の経過とともに、個人は母親なり母親像が実際に付添うことをあきらめることができるようになる。これは“内的環境の確立”といった言葉で呼ぶこともできる。<sup>11)</sup>実際に母親が存在しないセッションでもThやCwとの遊びを楽しむように促すことも今後の目標である。

#### 引用文献

- 1) 2) 3) 7) 9) 10) D・W・ウィニコット 橋本雅雄訳 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社 P.58 P.70 P.156 P.75 P.66 P.55 2000
- 4) 小此木啓吾 現代の精神分析 講談社学術文庫 P.385 2002
- 5) 6) 11) D・W・ウィニコット 牛島定信訳 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社 P.25 P.27 P.28 2002
- 8) 稲田雅美 ミュージックセラピー ミネルヴァ書房 P.186 2004

#### 参考文献

- 松井紀和 音楽療法の手引き 牧野出版 1997  
 氏原、小川他共編 心理臨床大辞典 培風館 2000  
 D・W・ウィニコット 牛島定信訳 子どもと家庭 誠信書房 2003  
 サイモン・A・グロールニック 野中、渡辺訳 ウィニコット入門 岩崎学術出版社 2001